

金沢美術工芸大学所蔵「架鷹図屏風」の修理における課題と今後の活用¹⁾

荒木 恵信

Problems in Restoring and Future Utilization of “Kayo-zu Folding Screen”

ARAKI Keishin

はじめに

二〇二〇年三月末日、金沢美術工芸大学所蔵「架鷹図屏風」(以下、本品と記す)の二年間に及ぶ修理が完了した(図1参照)²⁾。これは、二〇一六年四月から本品に関する調査研究を継続してきた研究チーム³⁾が、悲願を達成したときでもあった。新調された金地六曲一双屏風は往時の華麗な姿を踏襲し、そこに貼り込まれた十二面の本紙は止り木にとまる鷹の勇姿、その佇まいを現代に伝えたのである。

二〇一六年初めに本学に運び込まれた本品は、本紙へも及ぶ汚損や虫害が痛ましく、蝶番の断絶と骨格の歪みにより自立できない状態であり、早急な修理を必要としていた(図2参照)。研究チームの成果により修理の機会に恵まれ、修理委員会を組織して堅実な修理を実施してきたのである。

今回のように屏風を解体して本紙の裏打ち紙を剥がす修理では、作品の外観からはわからないその裏面や内側についての知見を得られる。本品においても、旧屏風の裏打ち紙類に墨書などが見つかった。修理委員会では、これら墨書などの判読と旧屏風とその下張り、旧裏打ち紙を資料として保存するべきだと判断した。

一方、修理が完了した今、新調した屏風に貼り込まれた本紙は新たな裏打ち紙や絵具の剥落止めなどの処置で、モノとしての強度を付加され安定した状態にあるといえる。新調した屏風も、本紙の保

存や公開の実施のために必要な性能を十分に保持している。しかし残念ながら、モノの経年変化はある程度遅らせることはできるが、止めることはできない。本品もこの先五十年から百年までには必ず次期修理を必要とするときが来る。修理の完了をよろこぶと同時に次期修理を示唆することも、文化財をより永く後世へと伝えるために重要な文化財保存の活動である。

以上からこの度の修理によって、解決が必要な課題と今後の保存と活用に関する課題が、次に示す①～④として明らかになった。

① 旧屏風の下張りや本紙の旧裏打ち紙に確認した文字の判読
② 旧保存箱、旧屏風、その下張りや旧裏打ち紙の具体的な保存方法と今後の活用について

③ 修理完了の公開と、修理の重要性の周知

④ 本品の今後の新たな活用について

本研究はこれらの課題を文化財保存学を総括とする学際的な研究チームによって遂行した。研究分野は、日本画、国文学、博物館学、視覚デザインである⁴⁾。

① 旧屏風の下張りや本紙の旧裏打ち紙に確認した文字の判読調査
判読調査の目的

本紙には薄い竹紙が用いられており、これが害虫によって細かく分断されてしまった箇所がある。そのため修理時にこの本紙を旧屏

風から取り外す際、損傷を広げたり分断された細かな断片が紛失したりしないよう、安全性を担保する必要があった。そこで屏風の下張りである蓑掛けの部分も含め、本紙の寸法よりも数ミリメートル大きい寸法で四方を切断してくり抜くように剥ぎ取った(図3参照)。本紙を剥ぎ取ったことよって、屏風や本紙の表面からは確認できなかった蓑掛けや蓑縛り、肌裏打ちや増し裏打ちを観察できるようにになり、そこに文字を確認したのである。文字の大方は蓑掛けと蓑縛りにある墨書であり、その他に印刷された文字も数件確認した。これらは、本品の来歴・歴史的価値に新たな知見をもたらす内容の可能性があるため判読調査を実施することにした。

この度の判読調査の対象とした文字は、旧屏風の本紙が貼り込まれていた箇所の下張りである蓑掛けと蓑縛り、本紙の旧裏打ち紙に確認した墨書のみである。旧屏風の他の箇所にも墨書はあると推測できる。例えば金地や縁の下層にあたる下張りなどである。しかし、旧屏風は本紙を剥ぎ取った状態で資料として保存するため、これ以上解体することはなく、他の箇所については確認できなかった。また、右隻第一扇に貼り込まれていた本紙下層の下張りについては、剥ぎ取ったそのままの状態を資料として保存するため、その状態で確認できる範囲の判読調査とした。

判読調査の方法

旧屏風から剥ぎ取った蓑掛けと蓑縛りは、和紙を正麩糊で幾重にも貼り合わせた層状を成しているため、下層の紙面に書かれている文字は確認できない。それら全ての文字を調査するには、正麩糊で接着されている和紙を一枚ずつ剥がして解体しなければいけない(図4参照)。

一方、旧裏打ち紙には、本紙裏面に直接貼り込まれていた旧肌裏打ち紙と、その旧肌裏打ち紙を覆うように貼り込まれていた旧増し

裏打ち紙の二種類がある。

裏打ち紙は、脆弱な本紙を裏面から補強し、本紙である基底材とそこにかかれる書画の安全性や安定性を高める役割をする。本紙はそれ自体一点しかない希少なものであり、この一点を守り継承するために取り替えの効く裏打ち紙を新調して、本紙の保存と公開に必要な強度を維持するのである。このことを踏まえると、本紙から裏打ち紙を除去する難しさが理解されるのではないだろうか。重要でありながら強度がおぼつかない本紙から、その強度を保つために貼られた裏打ち紙を剥ぎ取る作業がいかに困難か想像に難くない。本品の場合、本紙は前述のように薄い竹紙であり、これが経年変化や虫害などで著しく破損し、強度は非常に低い状態であった(図5参照)。その解決策として、本紙に表打ちによる養生をした後、旧裏打ち紙を部分ごとになんぞ剥がし取る方法がとられた(図6参照)。そのため、取り除かれた旧裏打ち紙の状態は、細かくちぎられた不定形の紙片である。そして正麩糊が付着した特有の硬さがあり、また、その正麩糊でそれぞれが部分的に接着してしまっていた。この紙片の塊から各紙片を取り出そうとすると、パリパリと音をたてて旧裏打ち紙をさらに細かい小片に破いてしまう危険があった。このような状態の旧裏打ち紙にある文字を判読するには、付着している正麩糊に湿りを入れてゆるめ、紙片を一枚一枚取り外し、全て平滑にしなければいけない。これの作業は、文字が書かれていない旧裏打ち紙についても、それらを資料として保存するために必要と考えられた。

日本画専攻の学生の参加

判読調査において旧屏風の下張りや旧裏打ち紙に関する作業を学生の文化財教育として活用した。具体的には、文化財保存に関心がある学生数名が次の作業に参加した。旧屏風の下張りや旧裏打ち紙

の解体、整理、解体後の各和紙の採寸、記録撮影である。旧屏風の下張りとは裏打ち紙はすでに本学所蔵の芸術資料であり、これらの作業ではこの資料に直接触れて形状の変更をするため、資料の状態や作業手順を理解するとともに細心の注意を必要とする。そこで学生たちには、それら資料の安全な取り扱いについて石川県文化財保存修復工場の修復師による実演を交えたレクチャーを受講してもらった(図7参照)。

作業期間は十月下旬から翌年二月であり、作業場所は学内の教室を使用した。旧屏風の下張りを解体して扇ごとに裏掛けと裏縛りに分類した後、各々の和紙にはその所以の明示と紛失防止のため和紙製のタグを貼った(図8参照)。タグには、その和紙が貼られていた扇の番号、裏掛けには重なり順を示す番号を書いた。採寸は裏掛けと裏縛りに実施した。本紙から除去される際に当初の矩形を失った旧裏打ち紙には行っていない。記録撮影は、墨書が確認された各和紙の表裏を対象としてデジタルカメラで撮影した。

本研究の四つの課題を先述したが、学生によるこの調査活動はその中の「④ 本品の今後の新たな活用」にも関わることで改めて後述したい。

文字の判読と考察

解体や整理の作業期間中に研究分担者である高橋明彦教授が墨書の内容を大掴みし、作業期間が終了した後、全ての資料の墨書を確認した。以下は高橋明彦教授による考察である。

裏掛け(小さい和紙の方)は、手習いの練習に使われたものでしょう、大きな文字が何度も重ねて書かれています。ほとんど仮名ばかりですし、また文意をなしません。

裏縛り(大きい和紙の方)は、大福帳(収支リスト)と人別帳で

しょう。

大福帳は、一枚の紙を縦長に折って、折り代を天にして表裏に書くので、開くと文字が向かい合わせになります。品物と数量、代金、支払い先名などが記されます。時代を特定できる年記は全くありませんでした。

人別帳は江戸時代のいわゆる戸籍制度で菩提寺を持つことを証明したものです。

家族の名前と年齢は書かれますが、この人別帳が記された年記は一つも見つかりませんでした。「一孫左衛門子孫三郎/是は寅の八月廿六日に相果申候」(裏縛り表12)などと表記するため、年記が一切無いのです。寺の名前として「一向宗浄照寺旦那分」などが見えますが、ぜんぶがぜんぶこのお寺のものと言えるかどうかはわかりません。

この寺は、現在でも奈良県磯城郡に実在するお寺のことと思われるますが、そのほかの地名としては、吉野郡、添上郡、添下郡(郡山)などが見えて、すこしバラエティに富んでいるためです。ただし、広く言えばみな大和国(奈良県)です。その辺りの文書であることは確実です。

年代は、江戸時代のいつ頃なのかは不明。

本品が奈良県と深いつながりがある点において、これまでの美術史的な考察に相反するものでないことを確認したが、今回の調査の範囲では年代の明記はなく、本品の来歴にまで言及するものではなかった。

判読調査の工程

判読調査の工程をまとめておく。

1、旧屏風の下張りとは裏打ち紙の管理者である本学美術工芸研

究所（以下、研究所）に本調査の許可を得る

2、旧屏風の下張りや旧裏打ち紙を受け取り、調査準備をするともにこれらの保管管理をする

3、学生に作業内容の説明及び、修復師によるレクチャーを実施する

4、解体前の状態の記録（屏風の何扇のものか、枚数の確認、デジタル画像撮影など）

5、旧屏風の下張りや旧裏打ち紙の解体（墨書などの有無を確認）

6、解体した資料の整理（タグを古糊で貼り付ける）

7、解体後の状態の記録撮影

8、文字の判読と考察

9、解体した資料を研究所へ返却

② 旧保存箱、旧屏風、その下張りや旧裏打ち紙の具体的な保存方法と今後の活用の検討

旧保存箱と旧屏風の場合

六曲一双屏風の本品を保存管理するには、保存箱が必要不可欠である。今回の修理では保存箱も新調した。これによって修理前に使用していたものは、旧保存箱として研究所で燻蒸され保存管理されている。その旧保存箱だが、本品には二つ存在する。ひとつは前所蔵者から寄贈されたもので、寄贈された時点ですでに保存箱としての強度は低下しており、使用できない状態であった（図9参照）。そこで、修理までの期間に使用する仮の保存箱を石川県文化財保存修復工房にご用意いただいた。これがふたつ目のものである。ひとつめの旧保存箱には墨書があり、資料としての保存が望まれる。一方、ふたつ目の旧保存箱は旧屏風用として使用されている。

旧屏風からは修理によって、本紙と、新調した屏風に再利用するための金具が取り除かれているが、その他は寄贈された当時の状態

を止めている。燻蒸を済ませてあるため虫害の進行はないものの、その生々しい損傷や汚損の跡をみることが出来る。蝶番の断絶と骨格の強度の低下により自立できない状態や、本紙を剥がし取ったことにより屏風の内部の様子なども確認できる（図10参照）。しかしながら、この旧屏風を展示作業のため移動すると、内部から害虫の死骸や糞など砂塵のようなもの、小さな紙片が散乱する。旧屏風を資料として保存するには、他の資料や展示環境への悪影響も考えられるため、内部の手入れが必要であろう。

これら旧保存箱や旧屏風は、本品の来歴を形成する要素であるとともに、文化財保存学や博物館学、美術教育などさまざまな分野で大学教育に活用できる教材といえる。

旧屏風の下張りや旧裏打ち紙について

墨書の判読調査のため、旧屏風の下張りや旧裏打ち紙の解体や整理を実施する前段階に、これらの今後の活用について考察した。本品の来歴や本品にまつわる研究資料として展示使用される場合がやはり最も多いと考えられた。前述の旧保存箱や旧屏風と組み合わせで展示される際に、これらの和紙も展示内容にとって効果的な形状で保管されていることが望ましい。そのような保存のあり方を目指し旧屏風右隻第一扇の下張りや旧裏打ち紙については、修復工房から返却された状態を維持することにした（図11参照）。その他の下張りは解体して判読調査を実施した後、扇ごとに整理した状態で保管することにした。ただし、研究所から受け取った右隻第五扇の資料には旧裏打ち紙のみで、旧下張りは確認していない。

以上から保存する資料は、旧屏風から剥ぎ取ったままの裏掛けと裏縛り、解体して一枚一枚の和紙の状態にした裏掛けと裏縛り、ちぎりながら本紙から剥がされたために定型のない旧裏打ち紙、微細な紙片、塵のような粉類である。前述のように解体した裏掛けと裏

縛りは、扇ごとにまとめた。定型のない旧裏打ち紙と微細な紙片、粉類は、扇ごとにそれぞれチャック式のビニール袋に入れた（図12参照）。

これらの資料を研究所に返却する際、全て保存専用の箱に入れることにした。資料の寸法から保存箱に必要な容積を確認し、文化財の長期保存箱を扱う有限会社資料保存機材から必要な寸法の箱を四点購入した。保存箱の選定には研究所との打ち合わせを行い、保存場所の状況を考慮しながら、資料を教材として使用する際の利便性も十分加味した。

旧屏風の下張りとは裏打ち紙の虫害対策

一方、これらの資料を研究所に返却するためには、虫害対策を講じる必要があった。旧屏風の下張りとは裏打ち紙の判読調査とその実施期間中の保管は、本学学内の実習室や研究室だった。これらの環境に起因した虫害の可能性を最小限にするため、無酸素殺虫を実施した。有限会社資料保存機材が販売する紙媒体資料を簡易的に無酸素殺虫できるモルテナイベを使用した。期間は三ヶ月を要するが、人体への安全性や経済的にも実施が比較的容易であり、効果も期待できる。方法は、スライド・チャック式ガスバリア袋に資料と酸素を取り除くエージレスセットを入れて密閉するだけである（図13参照）。無酸素殺虫の実施期間が完了した後、資料を前述の保存箱に入れて、この保存箱ごとビニール袋で覆い、本学の収蔵庫で燻蒸が実施されるまで念を入れた虫害対策を講じた。

実施の日程は、二〇二一年三月二十二日、全ての資料を研究所に返却し、研究所内において無酸素殺虫を開始した。スライド・チャック式ガスバリア袋の密閉具合や酸素濃度の異常の有無をチェックし、予定通りの日程で資料を保存箱に入れ替え、改めて研究所へ収めた（図14参照）。

③ 修理完了の公開と修理の周知 修理完了の公開

本品の修理は、文化財の保存や公開に関わる教育のみならず、美術やその歴史、伝統技術や風俗史など、多岐にわたる分野に学術的な話題を提供する要素を含んだ有意義な事例といえよう。本品やその他多くの文化財の修理とその意義並びに重要性についての周知を図るためにも、修理完了のこの時期を大いに活用すべきであり、お披露目をするべきだと考えた。ところが、令和二年度に修理完了のお披露目として本学美術工芸研究所ギャラリーと石川県立美術館の展覧会に出品を予定していたが、新型コロナウイルス感染防止のため全て中止となった。幸い令和三年度四月上旬から五月下旬の間、本学美術工芸研究所ギャラリーにおける展覧会にて発表の好機を得た⁵⁾。

周知活動

周知活動のため、前述の展覧会の来場者へ配布するリーフレットとマンガ冊子を学生に参加してもらい作成した。それらに掲載した内容は、本品の基礎情報や来歴、修理の意義、修理前後の比較画像、画像を用いた修理工程の解説などである。特にマンガ冊子では、学生が制作した2編の作品によって修理の工程や修復工房の様子、文化財保存の必要性が現実にも、想像力豊かに表現されて印象的な配布資料となった（図15参照）。さらに、展覧会と同時期に学内の別の展示会場に、本品の説明と修理の意義などを特別なディスプレイで示した。これも学生による制作であり、制作した学生たちと同年代の鑑賞者からの共感を得られる作品となった。（図16参照）。これらについては、「④ 本品の今後の新たな活用」にも関係しているためそこで改めて記述したい。

報道による周知

展覧会は、テレビや新聞、インターネットなどのメディアで告知や紹介される機会に恵まれた⁶。その中で本品の修理の完了についても取り上げられた。これがきっかけとなった来場者も多かったと考えられる。しかしながらそのような中でも、新型コロナウイルス感染防止のため来場できなかった人たちから、本品やリーフレット、マンガ冊子に関する問い合わせが県内外からあった。

また、本品と類似する架鷹図の所蔵者からの問い合わせもあった。これらに関しては、美術史的な視点からの新たな考察が必要と考えられ、今後の課題である。

様々なメディアによる周知は、想像以上の反響があった。今後は、この反響と関心を一過性のものにならない努力が必要と考えられる。

④ 本品の今後の新たな活用
現代に沿った活用を考える

本品の今後の新たな活用について、美術系大学の芸術資料として鑑賞のための展示の他にも、今この現代に沿った方法を模索したいと考えた。ここで重要視したのは、本研究を学生と共に展開し、そこから新たな手がかりを得ることであった。その内容が教育の中で実施される場合であっても、そうではなく楽しむものであっても良いと考えた。前述したように、この模索の段階で「③ 修理完了の公開と修理の重要性の周知」と関わることになった。それは、本品を活用する目的に「修理完了とその周知」を据えたからである。目的が明確になったことで、行動に向けた具体的な提案がなされて計画が生まれ、その具現化を目指して学生と共に行動を開始した。九月以降の研究期間は慌ただしくも充実したものとなった。

周知の方法として提案されたのが、リーフレットとマンガ冊子、ディスプレイである。これらの制作には、本学の視覚デザイン専攻

と修士課程視覚デザインコースの学生に参加してもらい、学生の視点からのわかりやすさとデザイン性を重視した。最初に協力してくれる学生たちが、本品とその修理について、ひいては文化財の保存継承についての理解を深めた。これらをもとに学生の視点を主体として制作した媒体を、他の学生や一般の人々へ提供したのである。

デザインを学ぶ学生の参加

リーフレットに掲載する画像は本品と色を合わせ、その画像の質を担保できる印刷方法を選択した。本品のサイズ感と絵画としての見やすさを検討してリーフレットの寸法を決めると共に、簡単に破棄されない存在感のある紙質の印刷用紙を用いた。マンガ冊子の雰囲気は、リーフレットと比較してマンガ雑誌やフリーペーパーに感じる親しみを演出した。マンガを制作する学生たちは制作の前に、本品と修理のレクチャーを受け、修復師へのインタビューや修復工房の見学を行った。鷹匠についても入門書や専門書による文献調査と、鷹道文化についてこれまでも本品の研究でお世話になっている山本一先生に助言をいただいた。学生はこれらの学びによって得た感動や理解を前提にして想像力に満ちた作品を完成させたのである。マンガとしての面白さに加えて身近な学生が描いた親近感もあり、本学学生のみならず市民からも多くの共感を得られた。リーフレットとマンガ冊子は、学内外で約三〇〇部を配布した。

修理を解説する展示のディスプレイでは、リーフレットとマンガ冊子のダイジェストとして話題を取り上げた。このディスプレイの展示会場では、数人で意見交換をしながらの見学が可能であり、同時期に公開していた本品と合わせて観ると個々の理解を他者と共有できる機会となった。

これらの研究内容から研究チームには多くの学びがあった。年齢差やその文化財を所有する集団の域を超え、人々にとつての親近感

を得られる文化財保存の周知のあり方を実践できた。これを応用し、さらに多くの文化財の保存へと結びつけたいと考える。

判読調査による教育的効果

一方、旧裏打ち紙に発見した墨書の判読調査に参加した日本画専攻の学生についても、本品の新たな活用により文化財教育として効果があったことを示しておく。前述したように文化財の保存修復に興味のある学生たちは、修復師のレクチャーを受け、資料に水刷毛を使って丁寧に湿りを入れて上麩糊をゆるめた後、糞掛けを一枚一枚慎重に外した。それぞれの和紙が元あった場所を書き止め、デジタルカメラで記録撮影した。採寸をして、資料の種類ごとに包みを分け、今後これら資料を使用する人にわかりやすく伝達する努力をした。これら一連の行動からは、文化財修理に必要な可逆性を体験から学び、文化財の資料整理の基本のひとつである将来の人々へ継承する精神を育み、作業の中では自らが進んで工夫を凝らし、より良い方法を生み出していたと私は捉えている。自らの発想によって生み出された行動に伴う精神は、作業が終了しても学生たちの中で消滅してしまうことはないだろう。これも本品の新たな活用のひとつと言えよう。

おわりに

本研究は、本品の修理だけを焦点にしているつもりはない。本学にはこれまで収集された多くの芸術資料が所蔵されている。貴重な文化財であるそれらを活用できる環境にあることは、たいへん恵まれており、そのような大学であることは大きな誇りである。本品の事例のように、活用が多くなればその中でモノとしての状態が確認され、継承への手立てについて検討ができる。モノの継承は、それ

を活用してよく理解することからはじまるのである。

文化財を守るために考察すべき視点は実に多く、多岐にわたっている。そのため、本研究においても複数の専門分野による学際的な組織を形成した。これにより、文化財の保存に関わる学術的な領域をさらに拡大、進化、発展させられたと考える。二〇一六年度以来、研究が進むごとに本品にまつわる新たな専門分野や領域へと視野を広げ、そこから見出される新たな課題にも果敢に挑戦し、力を注いできた。今回はデザイン分野によって、本品のみならず多くの文化財へと応用できる新たな保存のあり方について模索する好機となった。

文化財の修理に伴う研究は、修理が完了すると研究も終了してしまう場合が多いが、本研究はそれに当てはまらず、修理後の活用を大学教育と研究機関の両視点から考察する希少な例となった。これをもって長く継続してきた本研究チームの「架鷹図屏風」の研究は一旦終了する。そうはいうが多くの文化財や今はまだ文化財と呼ばれていないモノへの関心は尽きることはない。本品とともに他の芸術資料や文化財さらには、将来においてこれから文化財となるモノを消失させないよう、本研究がそれらの保存・修復・活用の一助となれば幸いである。

(あらき けいしん 日本画／文化財保存学)

(二〇二一年一月五日 受理)

謝辞

本研究に際しまして多大なご協力とご指導、ご支援を賜りました研究組織の皆様、一般財団法人石川県文化財保存修復協会並びに工房、山本一先生、金沢美術工芸大学美術工芸研究所その他関係各位に深く感謝申し上げます。

寺井剛敏先生、坂野徹先生には、周知活動に関わる学生指導、報道や配布資料のデザインに多大なるご協力ご支援を賜りました。改めてまして深く感謝申し上げます。

本研究の多くは、学生の皆様の発想力と活動に支えていただきました。ここに深く感謝申し上げます。

附記

註

- 1 本報告は、令和二年度金沢美術工芸大学教員特別研究「金沢美術工芸大学所蔵『架鷹図屏風』の修理における課題と今後の活用」の成果の一部である。
 研究代表者 荒木恵信
 研究分担者 松崎十朗、高橋明彦、渋谷拓、下浜臨太郎
 研究協力者 寺井剛敏、坂野徹
 研究協力者(学生) 田中優佳子、前田茜、横山茜(日本画専攻三年)
 坂井亜也子、麦谷真緒(日本画専攻二年)
 砂川友希、渡辺菜緒(視覚デザイン専攻四年)
 伊藤さと(視覚デザイン専攻二年)
 林蓉子(修士課程 視覚デザインコース一年)
 (学年は令和二年度当時)
- 2 本修理は、公益財団法人 出光文化福祉財団 修復助成(二〇一七年)によるものである。
- 3 荒木恵信「金沢美術工芸大学所蔵『架鷹図屏風』の絵画材料・技術について」
 金沢美術工芸大学紀要第六十四号 註2参照
- 4 分野の記載順は、「註1」に記した研究分担者の順に準じた。
- 5 展覧会名「新収蔵作品展 2021」、会期 令和三年四月七日(水)～五月二十八日(金)、会場 金沢美術工芸大学美術工芸研究所ギャラリー、主催 金沢美術工芸大学
- 6 北國新聞 朝刊 二〇二一年(令和三年)四月八日(木)
 北陸中日新聞 朝刊 二〇二一年(令和三年)四月一〇日(土)
 北陸放送 レオスタ 二〇二一年(令和三年)四月八日(木)
 石川テレビ 金沢市広報 みまっし金沢 二〇二一年(令和三年)



図1-2 修理が完了した本品左隻の展示風景



図1-1 修理が完了した本品右隻の展示風景



図2-2 修理前の本品左隻の展示風景



図2-1 修理前の本品右隻の展示風景



図5 虫害や汚損で痛みが著しい本紙



図3 旧屏風から下張りも含めて本紙を剥ぎ取る



図6 本紙の肌裏打ち紙を少しずつちぎって剥す



図4 層状の裏掛けを解体する作業



図8-4 糞掛けの糊をゆるめて解体する



図7 修復師によるレクチャーの風景

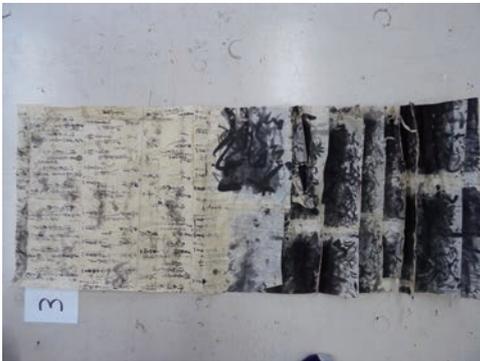


図8-5 解体の途中の状態



図8-1 旧屏風の下張り 修復工房から返却された状態



図8-6 糞掛けをはずし、糞縛りと分ける



図8-2 「図8-1」を広げると旧裏打ち紙が入っていた



図8-7 印刷紙や細かい紙片などを整理した状態



図8-3 糞掛けの状態



図11-1 旧屏風右隻第一扇の下張り

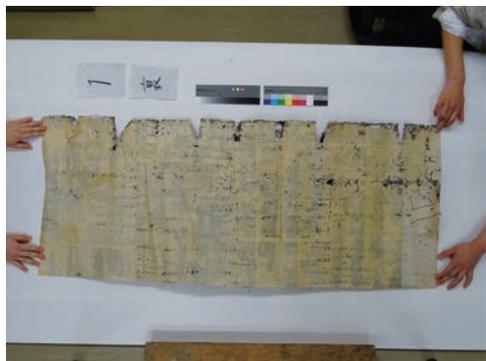


図11-2 「図11-1」の逆の面



図12 解体した旧屏風の下張りを整理した状態



図13-1 無酸素殺虫の実施風景①



図8-8 旧裏打ち紙に湿りを入れて平滑にする



図8-9 裏掛けにタグをつけて整理する



図9 旧保存箱



図10 旧屏風の展示準備風景 屏風の内部が学べる



図14-4 保存箱をビニール袋に入れて虫害を防ぐ

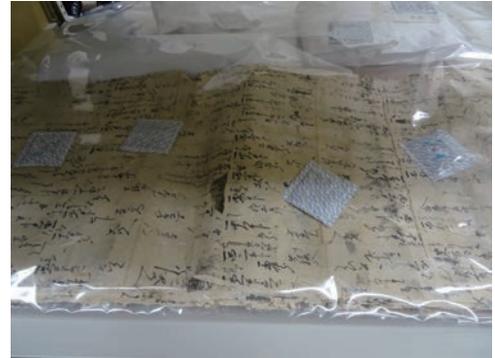


図13-2 無酸素殺虫の実施風景②



図15-1 周知用リーフレット



図14-1 保存箱に資料を入れた状態①



図15-2 マンガ冊子



図14-2 保存箱に資料を入れた状態②



図16 学内展示風景



図14-3 保存箱に資料を入れた状態③